



次 目

釋尊の衆生濟度……………	井 本
信行の基調を説ける觀音賢經……………	井 多
法華經七譬の意義……………	本 日
宗教と醫學の調和……………	石 誠
聖訓摘要……………	本 生
忍辱仙人……………	梶 正
醉生夢死と向上的生活……………	土 達

號月五年二十三第

教

第二卷第四號出づ

本誌執筆者

その堂々のたる内容
各方面の名家執筆

本多日生
後藤新平
床次竹二郎
永井米藏
岩野直英
高島平三郎
志賀重昂
佐藤鐵太郎

本多日生祝下著書

(現在品のみで、賣切れのものには注
文されても餘計な手数で困ります)

本尊論	布装 一部 金 七拾 錢
法華經要文	布装 一部 金 五拾 錢
法華經の行者日蓮	一部 金 二十錢 (送料共)
修法勸行の心得	一部 金 十五錢 (送料共)
教育勸語と思想問	一部 金 廿錢 (送料共)

毎月一日 十一日發行 一部金十錢

發行所 東京府荏原郡品川町南品川四二二

教發行所 (振替東京一〇九四〇番)

名古屋市東區田代町城山
統一編輯局
振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引を御願合下さい。

釋尊の衆生濟度

本多日生

斯ういふ親切な本當のお父様が教へて呉れるやうな教を立てたものがお釋迦様である。あとの教は或は女郎が教へて呉れたとか、藝妓が教へて呉れたりするやうな親切であつて、それに附いて行き居れば、到頭終ひには頸を吊らなければならぬやうなことになる。それが現代の甘やかしの文明である。どうしてこんな愚かなものが歡迎されるのか知らぬが、要するに人間に愚かな者が殖えたのだらうと思ふ。考の足らぬ薄馬鹿が多いものであるからさういふものが蔓るのである。昔でもさういふやうな思想は無論あつたけれども、對手にされなかつたものである。それは昔の青年の方が賢かかつた。そんな事をやつて

居れば生涯が立たぬ。今は宜いやうだけれども、終ひにはやり損つて監獄に行つたり、頸を吊つたりしなければならぬ。人生をそんな馬鹿氣たことで果してなるものかと考へて居つた。それは昔だからと言つても、男女の間に戀愛關係もあり、或は金錢の執着もあり、劣等なる慾望もあつたけれども、それを警戒して進んで來たものである。ところが今日の間はそれに尾を振つて追隨して行かんとして居る。昔はさういふ青年は馬鹿と言はれて居つた。それが今は世間並といふことになつたのであるから、皆が馬鹿になつてしまつた譯である。そんな事のあるべきものではない。

お釋迦様はこの愛着の由つて來たる根源を突いて教へられたのである。斯ういふことはお釋迦様に限る。他の者は愛着はいかぬと言つても、それではどうしたら宜いかといふことを教へはしない。「たゞまア中ぐらゐに惚れて置け」といふくらゐのことである。そんななま煮えのことで人間はをさまるものではない。ちようど飲酒家に節酒を強るが如きもので、「お前あまり澤山酒を飲んではいかぬ、ほど宜く飲んで置け」と言ふけれども、それは素人であつて、飲酒家の心理状態を知らぬ者である。まるつ切り飲まないなら飲まぬでも宜いけれども、飲み懸けた以上は酔ふまで飲まなければ、なま酔ひにして置くといふ譯にはいかない。それは飲酒家に聴いて見たら直ぐわかる。飲まなければ飲まぬでも居れるが、飲み懸けて、三合いける者に一合半でやめとけと言つても到底やめて置けるものではない。ちようど腹の減つた時に、全然食物にあり附かなければ食はない

でござうしてもこれはたゞさういふ外部から強めるとか抑へるとかいふやうな手綱のくゞり方ぐらゐではいかぬ、精神の内部を啓發せんければならぬ。人間をして眞に愛着の絆を斷せしめようといふことは、これは精神の理解、精神の教化を俟つて始めて行はれ得べきことである。

そこで釋尊の教は、汝自らその點を考へなければならぬ。お前が自分の精神から了解しなければならぬといふ所に教を立てゝ來た。その教は何であるかといふと、愛着の因は「我」「我所」の執であるといふことを説かれた。これは阿含の初めより佛敎を一貫して居るところの大教義である。我、我所の執とはどういふことかといふと、「我」といふのは俺がといふことで、この俺がといふ考が人間は誰にでもある、それが愛着の因である。モウ一つは「我所」といふのは我が所有といふことで、今日の言葉で言ふ所有權といふやうなもので、これは俺の家、これ

でも辛抱が出来るが、眼の前に御馳走を出して、半分ぐらゐ食ひ懸けた時に茶碗を取上げてしまつたら、腹はグツト、言ふし、益々堪へられないやうなものである。人間の斯ういふ劣等な慾望を中途半端で好い加減でこま化せと言つてもそれは出来るものではない。そこが難かしい問題である。それでは禁慾主義に行くかといふと、禁慾主義はたゞ一時を抑へるのみで、却つて猛烈に反動的に反動がやつて來るのである。だからそれもいかぬ。これを肯定して煽ればその方に泥着する。抑へたら反撥する。なか／＼厄介なものである。諸君が子供を育てるのでも考へて見たらわかる。無暗矢鱈に抑へ附けて置けば、終ひには家を飛出して華嚴の瀧に飛込むやうなことになる。元も子も無くしてしまふ。それかと言つて手綱を弛めて置けば毎晩ゴソ／＼出懸けて行つて、遂には不良少年の仲間に入るといふやうな譯で、なか／＼人間といふものは手加減が難かしい。そこ

は俺の女房、これは俺の錢、これは俺の自動車、これは俺の別荘といふやうに、何でも俺の……俺の……といふことで、支配慾、所有慾といふものがそこにある。それを侵された時に非常な苦痛を感じるのである。俺がと……思つて居るのに、その「俺が」が通らないことがあると、顔を潰されたとか何とか言つてむじやくしやする。宿屋や料理屋へ上つて行つても、誰も知らぬ顔をして煙草盆も持つて來ない。ボン／＼手を拍いても返事もせぬといふことになれば「俺が」も通らないから怒り出す。それをいきなり「へイ、あらつしやい」と言つて皆んなが頭を下げると、この「俺が」が急に鼻を高くして非常に愉快を感じる。さういふ「俺が」といふこと、「俺のもの」といふこの考の根柢を直さなければいかぬと言はれるのである。今日現代に横つて居る文明のあらゆる争闘、あらゆる面倒な問題も、この我、我所の人間の執着といふものがきつと緩和して來ない限りに

は到底救はれるものではない。お釋迦様の教は現代二十世紀の文化人が惱んで居るところの事柄を根柢より救ふものである。今はたゞあまり物質萬能過ぎて居るから、精神生活に歸れ、精神に歸れと言つて居るけれども、それはホンの表面の言ひ方ナンである。それだけでうまく行けば宜いけれども、歸れと言つてもなかなかさう直ぐ歸りはしない、それよりもこの「俺が」といふことをモツと能く本氣に考へて見なければならぬ。

ところでその我とは何ぞやといふことを徹底的に内省觀察すると、その時この人間の身体といふものが本當の自己でないといふことは直ぐわかる。体といふものは自分に屬して居るところの我所のものである。俺の体と言つて居るけれども、我そのものではない。だから指を切つて捨てることも出来れば足を切つて棄てることも出来る。悪い病氣にでもなつてだん／＼いざれが入つて來ればだん／＼切つて

ない。即ち心である、魂であるといふことだけは誰でも直ぐ考へられる。

そこで今度はその魂とはどんなものぢやといふことになる。大抵の人間が行詰まる。ちよつとわからぬ。ところでその魂といふものは今体にくつ附いて動いて居るものであるから、体が壞れてしまふといふと魂の行衛が直ぐわからなくなる。この体にくつ附いて居る自己だけしか知らぬのであつて、魂の本体といふものは少しもわからない。さうしてその体が確かなものかと言へば、甚だ薄弱なもので、自動車に衝つかつても直ぐ死ぬし、頭を一つ金槌でどぶかれても死んでしまふ。實に硝子の器の如きものである。ガチャンと落せば直ぐ壞れてしまふ。少し流行感冒でも流行るとか、悪性の病氣でも流行る時代になつて來たならば實に危ぶない。「この次の日曜にはお目に懸かれるか懸かれないかわからない」といふことになる。歸り懸けに電中の中で流行感冒に

棄て、しまふ。体はだん／＼小さくなる。或る病院にさういふ病氣に罹つた人があつて、足の先から腐つて來たので足を兩方とも切つてしまつた。その中に手がだん／＼腐つて來たので兩方の腕を切つてしまつた。足も無ければ手も無い、寝た切りで人に物を食はして貰つて、それでも生きて居つた。到頭終ひに内臓にくされが入つて死んでしまつたが、それが腐らずに居ればだん／＼切つても生きて居る。さうするとこの体は我ではない。それでは俺がといふのはいつたい何だ。どうしてもこの体の中に宿る生命といふものに歸着しなければならぬ。本當の自己とは即ちこの肉体ではなくして、生命、魂であるといふことだけは素人でも考へられる。併し放つて置けばそれも考へないで「俺が」と言つて直に手を振つたり鼻を指したりするやうなことになる。自分の体を指して自己だと思つて居る。これは最も幼稚なものである。ちよつと考へれば、我とはこの体では

罹つて、三日ほど寝込んで死んでしまつたといふやうなことが流行つて來ると、人間の肉体の脆弱なることは實に驚くべきものであるといふことがわかるのである。壯健で居る間はナリにまだ／＼命は續いて行くやうに思つて居るけれども、虎列刺病が流行つて來るとか、或は疫病が流行るとか、或は又先年の大震災のやうな天災地變が續いて來るといふと、人間の肉體の頼りなきものぢやといふことは直ぐわかる。それから又近所隣りを考へても死んで行く者がだん／＼ある。能く考へて見たならば自分の友達といふものは大抵死んで居る。少し頭の禿げたやうな人が考へたならば、あゝ誰も死んだ。彼も死んだ、澤山死んで居る。自分も何時かは死ぬものぢやないといふことは考へられるのである。不斷は忘れ勝であるけれども、落付いて考へればさう自分だけ死なないといふ譯にはいかぬ。死は必然に來るものである。さうして何時來るかわからぬ。併しそんなことを本

當に考へると氣持が悪いといふので、好い加減の所でごま化して置くけれども、本當に考へて見たならば、實に諸行無常、人間の生命といふものは頗る薄弱な状態に置かれて居る。それは思ふよりも薄弱なものである。ところが日本人はいつたいその事を考へない民族であつて、唯陽氣な、暢氣な、うはついで居る民族である。モウそんな事は言はぬことにしようぢやないかといふので、死といふ言葉を非常に嫌やがる、うつかり死ぬナンといふことを言ふ者があれば、「コラ、そんなことを言ふ奴があるか、鶴龜々々」と言つてごま化して、さうして酒を飲んで直に踊り出すやうなことをやつて居る。それは日本民族の非常に善い所だと一部の人は言うて居る。成程觀察の仕方に依つては、人間が死ぬナンといふことを考へないで、陽氣に活動的に發展的に行くと、それが爲に物質的になり、世の中が今日のやうに腐敗墮落して行く時に於ては、人一倍早く腐れ易い人間になる。そこを一つ注意しなければならぬ。最初からモウ半分腐り懸けて居るやうなものだから、腐る時分にはお先に御免を蒙つて、ちやうど後から病氣に罹つて先に死ぬといふやうな國民になつてしまふ。西洋の福ひを日本が承継いで、向ふはまだビク／＼して居る時分に、こつちが先にくたばつてしまふといふことになりはしないか。斯ういふ點に於ては餘りに現實主義の日本民族といふものは、洵に危ぶない國民であると私は思ふ。どうしても本當の人間としてはモツと生命の問題を徹底して考へて行かなければならぬ。

それは時間に於ては無限に續いて行くものである。その生命の内容はあらゆる能力を有つて居るもので、慈悲心もあれば、智慧もあれば、活動力もあれば、神佛に等しいやうな美しいものを有つて居る。その無限の内容を有つて居る生命、それが本當の自分ナンドけれども、その方は抑へられて、表面のつまらない考や、間違つた事や、短かい生命の間に左右されて居るといふことは、實に淺ましいことである。さういふ我を非常に結構なことに思つて、それが一番大切なものと思つて居るこの執着、自己の小我俗我を絶對的に愛して居るところのこの謬見を根本より棄てなければならぬ。

さうして見るとその今日自分だと思つて居るそれすらも、本當の自分ではないのであるから、それに対して一切の愛着といふものを有たない。さう言つたからと言つて自分で自分の頭をぶち割るやうなことをするには及ばないけれども、併しこの自分の肉

敗墮落して行く時に於ては、人一倍早く腐れ易い人間になる。そこを一つ注意しなければならぬ。最初からモウ半分腐り懸けて居るやうなものだから、腐る時分にはお先に御免を蒙つて、ちやうど後から病氣に罹つて先に死ぬといふやうな國民になつてしまふ。西洋の福ひを日本が承継いで、向ふはまだビク／＼して居る時分に、こつちが先にくたばつてしまふといふことになりはしないか。斯ういふ點に於ては餘りに現實主義の日本民族といふものは、洵に危ぶない國民であると私は思ふ。どうしても本當の人間としてはモツと生命の問題を徹底して考へて行かなければならぬ。

さうするとどうしても今の普通人の考へて居るやうな「俺が」といふ表面の我は、所謂小我、俗我といふものであつて、これは本當の自己を知らない者である。本當の我とは普通人の考へて居るやうなものではない。この奥に潜んで居るところの生命、それが壊れた時にも、それは小さな我で、本當の我はまだこつちらにちやんとあるのだといふことになるから、この肉體の死といふものはそれほど恐ろしくない。随つて肉體に關係して來るところの歡喜といふものは絶對でなくして、眞の我の無限の生命に屬する歡喜が眞の歡喜であるといふことに根本の了解が附く譯である。

そこから割出すと一切の人生の解釋はまるで違つて來る。そこに我に屬する物に對しての執着心といふものも、これは俺の家だ、これは俺の女房だ、これは俺の錢だといふ支配慾、所有慾といふものを、普通人のやうに濃厚に考へない。一時自分に屬して居るけれども、併しこの世の中に存するものは元來誰に屬するといふことはないのである。斯うして夫婦になつたこの女が俺の女房だと言ふけれども、それは人が合せたものであつて、死んで行く時分にはやはり別々に行くのであるし、善根を積んで居れば

一方は佛様にもなり、悪い事をして居れば餓鬼にも行くし、永遠に生活を共にすることの出来るものではない。一時の因縁を以て今は女房になつて居るだけのことである。自分が過去に幾らか善い事をして居つたから斯ういふ良い女房が来て呉れて居るけれども、どうせこれも長く添ひ遂げることは出来ない。こつちにそれだけの果報は無いといふやうに考へて見ると、女房が「あなたはやうな人は嫌ひです」と言はれれば「へい御尤さま」と言はなければならぬ譯ぢや。それを「おのれツクそ、生意氣を言ふか」と言つて出及庖丁を振上げたりするけれども、そんな自惚れた考を起すべき理由は少しも無い。又女の方から言うてもやはりさういふ譯で、縦ひ自分が美人に生れてヘナチヨコの男と夫婦になつて、「あなた顔を見るたびに氣持が悪い」といふやうなことを言ふ場合でも、やはり因縁關係を以て夫婦になつた以上は、さう永遠の關係でもない。斯様なヘナチヨ

コを夫に有たなければならぬといふのは、己れの爲したる過去の報ひに依つて、立派な男と添ひ合つた時分に、或は不義をしたとか不都合なことをした爲に、今度は懲しめの爲に斯ういふ目に遭ふのであらう。そこに廻り合せて来て居る運命は誰を憎むこともない。自分がそれだけの報ひを受けなければならぬ原因を有つて居るのだといふことに考へれば、ヘナチヨコの顔を見るたびに己れに反省するといふことが出て来る。

さういふ風に人生を考へて行くと、あらゆる問題に於て非常に含蓄的になつて行くのである。たゞ表面からバツとものを考へない、奥深い意味ある觀察といふものが一切萬端の問題に出て来るのである。そこで我、我所といふこの俺がといふこと、俺のものぢやといふ小さき我執といふものが薄らいで来ることに依つて、一切の愛着の絆の根柢といふものが除かれて来るのである。一通りの愛といふもの

はなくてはならぬし、又自分の家を愛するといふことも必要であるけれども、併しこれが地震で潰れやうが、火事で焼けやうが、それは諸行無常と佛の教へられた通り、木で拵へたものは焼ける、石で拵へたものもひつくり返る。石が焼けたなら不思議だけれども、木が焼けたに不思議はない。何もそんなに驚くことはない。建築が粗末であつたからグラ〜と動いてひつくり返つた、當然のことである。それを大變なことのやうに思つて驚くといふのは實に人間の考の足らざることだ。耻かしい次第である。私共はそんなことは少しも驚かない、この統一閣の建物が震災で焼けた時でも「それは木造であつたから焼けたらう」焼けない方が宜いといふことは知つて居る。焼けた方が宜いと決して思はないけれども、「到頭焼きました」さうか、それでは又建てなければならぬナ」と思ふだけである。それ以上は人間の爲すべき事を爲せば宜いので、建てようと思つても建て

ることが出来なければそれも己むを得ない。建てたいと思ふけれども建てられないといふだけの話である。飲みたいと思ふけれども水が無い、喉が渇くといふだけの話で、それが爲に悶え苦しむといふことは甚だ暗愚なことである。爲すべき事を落付いて奮闘努力して、その事が出来ないと云つて嘆いたり悶えたり罪を犯したりするといふことは無くなつて来る。この爲すべき事を適當に爲すといふことが本當に人を救ふ所以である。そこに執着の苦しみといふものが除かれて来るから、一切の苦しみの根本が切棄てられる譯である。

信行の基調を説ける觀普賢經

井村日威

一七、夢の中に雲山の説法を見る

聞空中聲已復勤誦習大乘經典。以誦習大乘方等經。故即於夢中見釋迦牟尼佛與諸大衆。在耆闍崛山説法華經。演一實義。(四九〇、二)

禮佛誦經懺悔の功力に依つて夢現の間に釋尊の靈山説法の有様を見奉り得たのである、此迄は夢現の間に段々進展して来たのである、丁度病氣の直る時の様に、薄紙を剥ぐ様な有様で、少しづつ、行者の罪障の消滅するに従ふて、佛に接近し得る様に爲つたのであるが、惜むらくはそれが夢の中であることが

一八、悟中に釋迦佛を見る

教已懺悔渴仰欲見合掌胡跪向耆闍崛山。而作是言。如來世雄常在世間。慙念我故爲我現身。作是語已見耆闍崛山七寶莊嚴無數比丘聲聞大衆。寶樹

行列寶地平正復敷妙寶師子之座。釋迦牟尼佛放眉間光。其光遍照十方世界。復過十方無量世界。(四九〇、四)

自我憫の中に一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山と一偈の簡單なる文字に依つて示された事柄が、今經に於ては經の初より此處に至るまでの間に詳細に御示に相成つたので、其次第順序は今經に御示に相成つた様な工合で少しづつ進展して行つて遂に本佛釋迦牟尼佛の御姿に接し得らるゝので、今の信者達が考へて居る様に題目を何遍唱へた、直ぐに佛の杯と云ふ様な簡單な譯には行かない、夫れ程に我等の罪障は軽くは無い、末法に生を受くる程の我等、並大抵の罪障では無い筈である、それがお題目を少し唱へた位で罪障消滅が出来様とは思はれない、お自我憫の御文丈で、一心欲見佛とあるから一生懸命にお題目を唱へればと見へるが、今經の様に

詳細に解剖せられて見ると、そうは簡單には行かないと云ふことが氣が付くであろう、今日迄此經杯は不必要な様に考へて祿々讀みも仕ない人達が多かつたことが日蓮主義信行の案れた所以であらうと思ふのであります、私は今經の趣意に依つて我宗信行の根本理想を立直すことを必要と信じて居るものであります、本文に就て申せば、行者は更に現實に釋尊を見奉らんとして懺悔し渴仰し合掌胡跪して靈鷲山に向ひ、佛身を現し給はんことを願ふ、佛は行者の至誠を嘉納せられて、行者の前に佛身を示さるゝ、先づ最初にお示し下さるゝのは法華經寶塔品の時にかける分身來集の時の有様である、此處は夢の中に見るのでは無くて、現實に見せしめらるゝのである、前來の佛身を見たのとは大に其趣を異にして居るものである。

一九、釋迦の分身來集を見る

此光至處十方分身釋迦牟尼佛一時雲
集廣說妙法如妙法華經。一一分身佛
身紫金身量無量坐師子座。百億無
量諸大菩薩以爲眷屬。下略（四九一、二）

分身の諸佛來集の光景を説かれてあるが、詳細は妙法華經の如して、法華經寶塔品の分身來集の有様を此に略舉せられたのである、分身來集は釋尊の久遠の本佛たる釋尊を爲すものであるが、行者の目的は久遠の本佛たる釋尊に御目に懸るのである故に、今は其發端である寶塔品の分身來集の一段を擧げて後段の本化の出現久遠の顯本等は茲に省略せられてあるのである、詳しく説けば久遠の顯本迄行くのであるが、既に法華經に説き終つた事である故に省略したものである。

二〇、行者宿命通を得

立派なものであつた事が了了分明ではつきりと分つて、宿明通を得た様に爲つて豁然大悟して初住の位に登つて旋陀羅尼を得ることが出来た、そうなれば最早佛様の御姿は直々に拜見し得ることが出来る様に爲つたのである、此處まで行けば後は佛に成るのは大して六ヶ敷い事ではない、竹の節を破る様なもので、一つの節さへ破れば、あとはばん／＼と自然に破れて行く様な有様である、此位に登るまでは骨が折れるので、私共が朝夕勤行の時に靈山往詣を祈願するのは此位に登る事を目標として祈つて居るのであるが、それには今經に今迄説かれてある様な懺悔の精神が修行の中樞であり、禮佛誦經に依つて其精神を強めて行くので無ければ、其目標に達する事は出来ぬのであらうと思ふのであります。今經は最初に申上げたが如く、觀普賢と行法とが分けられてあつて、經の始は觀普賢で後段は行法と大体分たつたが、然し全然別箇のものとする事は出来ない、始

爾時普賢菩薩復放眉間大人相光入
行者心。既入心已行者自憶過去無數
百千佛所受持讀誦大乘經典。自見故
身了了分明。如宿命通等無有異。豁
然大悟得旋陀羅尼百千萬億陀羅尼門。
從三昧起面見一切分身諸佛衆寶樹
下坐師子床。下略（四九一、九）

信解彌進んで過去の罪業頓に消滅して仕舞ふたが故に、今度は過去に於て作したる功德善根の方面が表に顯はれる様に爲つた、我等は過去に於ても多少の善根功德を爲した事もあつたであろうが、罪業深きが爲めに蔽ひ隠されて居つたのであつたが、今は罪業が無くなつた爲に、過去無數百千の佛の所に於て積みし善根が顯はれて來て、自身の身體が在外

めは觀普賢を主として行法を従とし、後段は行法を主とし觀普賢を従とする事に爲つて居る、此處迄は前段に屬する分で主として普賢菩薩の御手引に依つて佛身を見ることの出来る迄の道程が説かれ、その目的を達するに禮佛誦經懺悔の方法を要する旨を説かれたのである、此處より下は主として實行方面の行法を説かれてあるので、六根懺悔の詳細が説かれてあるので、故に此より下には佛身を見ること
が従として説かれてあることを知つて置かねばならぬ、此關係を了解して此經を見ぬと眞の會得は困難である。

二一、諸菩薩六念の法を説く

時諸菩薩異口同音教於行者清淨六
根。或有說言汝當念佛。或有說言
汝當念法。或有說言汝當念僧。或

有説言「汝當念戒。或有説言「汝當念施。或有説言「汝當念天。如レ此六法是菩提心生菩薩法」(四九二、八)

此より下六念法と六根懺悔とが説かれてあつて、佛法を修行するもの、行規の標準が示されてあるのである、六念法は初心の者の佛法に志す場合に示されたものである、六念の中の初の三は三寶に歸依することを示されたものである、我等が修行の基準は佛陀の慈悲に其源泉を發して居るのであるから、先づ其源泉を第一に念しなければならぬ、其慈悲より我等を教導すべく、如來は教法を與へ給ふた故に次に法を念せねばならぬ、其教法は此を解説し信解を與へられねばならぬ、即ち僧伽の宣傳に待たねば我等に役立たぬ、そこで僧を念すべしと説かれたのである、此三寶を念じ歸依することが、我等の菩提に趣向する第一階梯である、今日は此三寶の關係に就

次に天を念することは冥福を祈ることである、此は在來の印度の思想を開顯せられたものである、佛法の本義より言へば天を念すると云ふ様なことは必要なことでは無いが、其時代の一般思想が天を念じ冥福を祈ることを考へて居つた故、強て排斥する必要も無いから、開顯的に天を念せよと教へられたものである、此六念の法は前の三は智慧莊嚴であり後の三は福德莊嚴であるとは優婆塞戒經に説かれてある、前の三は我等に菩提に向ふべき途を教へらるゝものなれば智慧莊嚴と爲り、後の三は我等に善根功徳を積ましむる者なれば福德莊嚴と爲る譯である、此六法を念すれば菩提心を發すものであり、菩薩の道に向つて出發するものなるが故に菩薩を生ずる法なりと説かれたのである、優婆塞戒經には「能く此二莊嚴を具足すれば則ち微妙の善巧方便を得て、世法及び出世の法を了知せん」と説かれてあるも同様の意味である、初心の者としては此六念の法を味へば佛法の

て下らぬ議論を爲して居るものもあるが、常識に依つて考へて直ぐに首肯出來る事柄である、此三寶に歸依する事を忘れて佛法は無いと云ふて善いのである、我等は三寶に歸依し三寶の指導に待つて、我等の向ふべき方向を定め得るのである、三寶に指導せられて何をやる、次に云く戒を念すべし、施を念すべし、此二つが實行の方法である、此二は言葉を換へて言へば止惡と作善である、戒法の中にも止惡作善の意義はあるが、主として止惡の方で、自己の反省であり過誤を匡正するのが戒律の根本義である、故に戒を念することは消極的に自己を反省して行く方面である、施を念するとは積極的に善根功徳を積むて行くことで、即ち作善である、人間は此兩面が具備して行かねば完全なる人格者と云ふことは出來ぬ、自己を反省すると同時に、進んで他の爲に盡すと云ふことが出來ねばならぬ、戒を念じ施を念すると云ふことは此兩面を具備すべく教へられたのである、

行規は自然會得が出來るであらうと思ふ。
二二二、眼根懺悔の法を明す

汝今應當於諸佛前發露先罪至誠懺悔。於無量世眼根因緣貪著諸色。以著色故貪愛諸塵。以愛塵故受女人身。世世生處惑著諸色。色壞汝眼爲恩愛奴。故色使汝經歷三界。

(四九三、三)

六根の中に先づ眼根懺悔を明す、初に眼根の罪過を擧げられて居る、元來吾人の眼は其對象として種々の物體を見るのであるが、其物體に對して執著を生じ、其執著の爲にあらゆるものを自身に取込まふとする、若し眼が無ければそんな執著を起す様な事もないであらう、眼のある爲に罪惡を犯すと云ふ譯に爲るが、眼で見た處で心に惑著が無ければ問題に

は爲らぬが、此處では六根共通の罪惡として眼根を通じて來る惑著を責めたのである。此經文に殊に女人の身を受けと云ふ言葉があつて婦人をより以上に執著の多いもの、様に言ふてあるが、此は比較的の事で、婦人に限つて惑著の多い意味では無い、男子にも婦人より著心の強きものもあるが、女子の方が幾分つまらぬ事に引懸つて居る人が多い様に思はるゝ、我等が三界を流轉することは全く諸色に愛著を生じた結果に外ならぬと云ふことを説かれたのである、三界の迷界を出づるには愛著の心を捨てること一番肝要である。

爲此弊使盲無所見今誦大乘方等經典此經中說十方諸佛色身不滅汝今得見審實爾不眼根不善傷害汝多隨順佛語歸向諸佛釋迦牟尼佛說汝眼

正念大乘心不忘捨是名懺悔眼根罪法 (四九四、二)

懺悔の實行方法を説かれたのである、先づ諸佛菩薩の御加護を乞ふて、其御前に於て自己の過罪を發露し懺悔する、其發露の回数を一たび説けと言はれて三回繰返すことに爲つて居るが、三返も繰返せば忘れる様な事はあるまい、斯様に三度び言葉で願はし、五體を地に投じ大乘經典を念じて之を忘捨せざる様に、此が眼根懺悔の法である。

稱諸佛名燒香散華發大乘意懸繒幡蓋說眼過患懺悔罪者此人現世見釋迦牟尼佛及見分身無量諸佛阿僧祇劫不隨惡道大乘力故大乘願故恒與一切陀羅尼菩薩共爲眷屬作是

根所有罪咎。諸佛菩薩慧眼法水願以洗除令我清淨 (四九三、六)

自己の眼根が過惡あるが故に現實に盲目同様である、大乘經典の中には佛身不滅を説けども我等の眼には不滅の佛身を見ることが出来ない、汝の眼は有つても無きか如き状態に有る、故に其罪過を懺悔して諸佛世尊の加護を祈り我等が罪咎を發露して其穢濁を洗除し清淨ならしむる様努力するのである。

作是語已遍禮十方佛向釋迦牟尼佛大乘經典復說是言我今所懺眼根重罪障蔽穢濁盲無所見願佛大慈哀愍覆護普賢菩薩乘大法船普渡一切十方無量諸菩薩伴唯願哀愍聽我悔過眼根不善惡業障法如是二說五體投地

念者是爲正念若佗念者名爲邪念是名眼根初境界相 (四九四、八)

此は眼根懺悔の功德を擧げたのである、眼根を懺悔せし功徳に依つて、此行人は現世に釋迦牟尼佛及分身の諸佛を見奉り、未來は惡道に墮ちざるの大功徳を得た、大乘經典の諸法實相平等無差別の原理の故に、如我等無異の誓願の故に此經を信じ此經に依つて其罪過を懺悔するものは此の如き大功徳を成じ得て、恒に初住以上の菩薩達と仲間に爲り得るのである、斯様な工合に懺悔の法を行する者を正念と爲し、他の法を行する者を邪念と爲す、此迄が眼根懺悔に就て初て願はるゝ功徳の有様を説いたのである、故に眼根初境界の相と名づくと言はれたのである。

二三、眼根悔力の故に多寶塔を見る

淨眼根已復更讀誦大乘經典晝夜六

時胡跪懺悔而作是言。我今云何但見釋迦牟尼佛分身諸佛不見多寶佛塔全身舍利多寶佛塔恒在不滅我濁惡眼是故不見作是語已復更懺悔過七日已多寶佛塔從地涌出。釋迦牟尼佛即以右手開其塔戶。見多寶佛入普現色身三昧下略（四九五、五）

既に釋迦牟尼佛及び分身の諸佛を見奉りしも未だ多寶如來の寶塔を見ることを得ざるはまた懺悔の足らざるかと更に禮佛誦經して眼根の過罪を懺悔する、斯様にすること一七日を過ぐれば多寶佛塔は地より涌出して行者の前に現じ、釋迦牟尼佛は右の手を以て塔の戸を開き給ふ、多寶如來は普現色身三昧に入つて、其全身を行者に御示し下さるのである、而して行者に對して獎勵の御言葉を下される、汝今真

實に能く大乘を行し、普賢に隨順して眼根懺悔す、此因縁を以て我汝が所に至つて證明と爲らん」とお説き下さる、釋尊說法の會座には釋尊の所説は皆是眞實なりと證明し、今は來つて行者の爲に證明と爲り給ふ、尊き極では無いか、斯くして眼根懺悔の功力は一層進展して遂に多寶佛塔までも見得るに至つたのであるから、眼根の懺悔は一先づ此で終り、次に耳根の懺悔に移るのである。

法華經七譬の意義

五、化城寶渚の譬

第四の化城論品に説かれたる化城寶渚の譬は、茲に大勢の商人があつて寶を取りに行かうといふことになつて、案内者がこれを導いてだんたんゝと行つたけれども、道が遠いものであるから退屈をして、モウさう遠ければ行くのは嫌だと言ふやうな者が出來た爲めに、案内者が方便を設けて化城といふものを現はして見せた、化城とは唇氣樓である、即ち空中樓閣を描いたので、何にも無い所だけれども狐につまゝれたといふやうな譯で、非常に立派な宿屋がそこに出來て、温泉もあるし、女中も別嬪である、御馳走もうまいといふやうな譯で非常に氣持が好い。

本 多 日 生

今まで歩いて來た疲れもすつかり取れた、これからモウ一いき奮發して寶渚に向つて進んで行かなければならぬといふことになつた。ところが大勢の者が言ふには、モウ寶渚などに行かないでも宜い、斯ういふ立派な宿屋へ只で泊めて貰つて、風呂もよければ女中も美人である、御馳走も結構、モウ一生此處に暮したいといふやうに、腰を落つけてしまつたものであるから、そこで案内者が、さういふやうにお前達が此處に留まつて進まぬといふ事であれば宜い、今夜はまア寝なさい、その代り明日の朝吃驚するなよと言つて、皆の寝て居る間に化城をすつかり滅却してしまつたものであるから、夜が明けて見る

と自分達は田圃の枯れ草の上に皆寝て居つた、女中も居らんければ蒲團も何もない、そこに居れば蛙がビヨン／＼顔の上に這ひ上つて來るといふやうな譯である。イヤこれは堪らぬといふので、そこで皆又行程を起して遂に寶渚に達して、さうして寶を存分に探ることが出來たといふのである。

これは何に譬へられたかといへば、案内者といふのはお釋迦様であつて、寶を取りに行く大勢の商人といふのは、即ち佛教を信する人々を言ふのであるが、天親菩薩はこの譬を評論して

實には涅槃なきに涅槃の想ひを生ずるには化城の譬を説いて治す。

と言はれた。これは佛の方便の教のところに通りの御利益があつて、涅槃の覺を得たといふやうな事が説いてある、方等部の諸教などにも説いてあるが、その方便の教のところ、「これは結構です」と言つて止つてしまつて、そこで色々の宗旨を立てる。そ

れでは今の化城の宿屋で尻を落つけてしまつて、モウ寶渚へは行かぬといふことになるから、さうなる釋尊の御精神に背く譯である。そこでその化城を滅却して更に寶渚に導いて行かなければならない、それが爲に方便の教といふものは役に立たぬといふ事を説かれた。それは法華經の開經の無量義經に於て明かに化城を滅却して、「四十餘年未顯眞實」と説かれた、これは非常に大事なことである。

性欲不同なるがゆゑに種々に法を説き、種々に法を説きは方便の力を以てす、四十餘年には未だ眞實を顯はさず。

これは誠に明かなことで、衆生の性質と欲望がいろいろ違ふ。「性」は先天の性質、「欲」は今動いて居るところの欲求であるから、その性に依つて自から欲求が違ふ、純良なる性質に依つて欲求の高い者もあり、不純なる性に依つて欲求の低い者もあり、色々ある、智慧に於ても優劣があり、情操に於ても優劣

があるから、そこで様々な教が必要になつた。その様々に説いた事は方便力から出て來たものである、最初波羅奈斯鹿野園に於て第一回の説法をしてより、般若經を説き終つて今將に法華經に這入らんとして居る、この四十餘年の長き間には、未だ眞實を顯はして居ない。「未顯眞實」と言つたのは即ち化城を打ち破つたのである。方便の教に執着するが故に、その化城を滅却して寶渚に進むべきことを教へたのである。それから法華經に來つて「今正是其時決定説大乘」——今正しく是れ其の時なり、決定して大乘を説かんといふので、法華經に於て眞實を顯はされた、

「開方便門示眞實相」——方便の門を開いて眞實の相を示す、斯様にして法華經に於て寶渚を明かにした。そこにあらはれたものは前に申した佛性論の眞實と本佛論の眞實と、教に關するところの統一主義の眞實、モウ一つは全宇宙に關しての哲學的眞理を説かれ、又修行の上に就ては信行を本にしての菩薩

行を立て、一切の者が積極的に佛教を修行して行くといふ活き／＼したる教を説かれた。これが法華經の寶の渚に達したところである、あとのお經は皆方便であるが故に、今申した佛性論、本佛論、教法論、實相論、行法論の五つの大切な教義が分裂して居つたのである。

六、醉人繫珠の譬

次に第五には五百弟子授記品に説かれたところの醉人繫珠の譬であるが、これは或る人が用事があつて他所に行く時分に、その友達が酒に酔はらつて寝て居るのを見て、どうも此奴は事に依ると食ふに困るやうになるかも知れぬ、可哀相だといふので、非常に結構な珠をその友人の袂の中に入れて置いてやつた。ところが友人は酔はらつて寝て居つたものであるから、能く言ふて聞かしては置いたけれども、それは驢魔として聽取ることは出來なかつた。「お前

は今酔つて寝て居るけれども、眼が覺めた時分に親切な友達も居なくなつて生活に困ることがあつてはならぬから、その時分にはこの珠を取出してこれを錢に易へろ、さうしたならば幾百萬圓の錢でも得られるから汝の生活は決して困るやうな事はない、俺が傍に居つて世話をしやりたいけれども、自分は王様の命を帯びて他國に使しなければならぬ、君命は黙し難いこと故に君の世話をすることが出来ない、僕が歸つて来るまで兎に角やり損はぬやうにして呉れ」と言つて、懇々と言ひ置いたけれども、一方はグデン／＼であるから何も記憶して居ない。眼が覺めた時分にはその親切な友達はモウ居なくなつてしまつたし、親類も無いものであるから、何處へ行つても世話をし呉れる者が無い、とう／＼乞食になつてしまつて、フラリ／＼と彷徨つて居る、さうして「乞食も氣樂ぢや、貰つて食つて寝て居れば宜いんだ」といふので、夜は公園のベンチに寝ては、起

きては遊廓へ行つて女郎の餘り物でも貰つては食ふといふやうな事をやつて居つた。さうして居るところへ前の親切な友人が用事が済んで歸つて来た、見るとその男はポロ／＼の着物を着て公園のベンチの上で寝て居る、さては俺の推察通りこんな事になつたか、あゝどうも困つた奴ぢやと思つて、傍に来て「君はさうしてそんな事をして居るのだ、僕があれ程言うて置いて行つたのに、袂の中を探して見たまへ、あの珠があるだらう、それさへあればそんな乞食などせぬでも宜いのだ」と言はれて、それから袂の中を探して見ると、不思議やその珠は落しも毀けもせずにあつた、明煌々たるころの立派な珠が出て来た。「それ見たまへ、それさへあればモウ大丈夫だ」「これは善い物があつた」といふので、その珠を兩替屋へ持つて行つて金に替へやうとすると、それは非常な價值のある珠であつて、それだけの金は逆も懐中などには這入り切らない、荷車でも挽いて來

て下さいといふ話である、それから荷車を挽いて兩替屋へ行つて、その珠を兩替して見ると、次から次へと千兩箱を持つて来て何萬圓とも何十萬圓とも數へ切れない、逆も荷車一臺には積み切れないので、吃驚してしまつて「兎に角今日はこの位にして歸らう」といふので、千兩箱を百か二百持つて歸つて、それから「サー何でも欲しい物を買へ〜」といふのでドン／＼買ひ込んだけれども、なか／＼錢は盡きない。斯くしてその男は非常に幸福な生活に入つたといふ事が説いてある。

その醉人といふのは吾等一切衆生である、親切な友達といふのはお釋迦様である、その珠を繋けるといふのは教を與へること、即ち法華經の教である。吾等衆生は本來佛性を有つて居るけれども、有つて居る佛性だけではいかぬので、どうしてもこれを引き出す方の教が無ければならぬ。人間の性質といふものは、自然に委して置いたのでは決して發達をし

ない、方便品に説かれてあるが如く「法は常に無性なり、佛種は縁より起ると知しめす、是の故に一乘を説きたまふ」即ち一乘の教といふものは、人々の佛性が發動して来る爲めの呼び出しにかけるのである、外から導かなければならない、縁によつてあらはれて来る。縁を除つてしまへば人間その者といふものは無性と言つて、善とも惡とも何とも言へないものである、例へば茲に赤ん坊が寝て居る、これは善とも惡とも何とも言へない、たゞこれを導くところの家庭の教育なり、社會の事情なり、いろ／＼のものゝ惡い方に導いて行けば、この可愛らしい赤ん坊が遂には泥棒にもなり殺人犯にもなる、又これを善縁を與へて善き教化を以て導いて行けば、聖賢の道を學んで志士仁人となりて世の中の爲めに盡すといふことになつて行くのである。人間生れながらの性そのものをその儘にして置いては、どちらともわからぬといふのが「法に常に無性なり」といふこと

で、善性とも悪性とも言ふべきものではない。人間ひとりをつまへて「これは善人か悪人か」そんな事が言へるものではない。今はボカンとして居るから善人でも悪人でもない、善とも悪とも言い難い状態である、縁によつてごつちへでも行く、いきなりその人間の頭を拳固で殴れば腹を立てるし、こつちが頭を下げればニコ／＼する、笑はずやうにも怒らずやうにもごちらでも行ける。だから人間そのものは善とも悪とも言へるものではない、縁によつて善ともなり悪ともなるものであるから、大事なのは縁である。その縁の中に人類の一番大事なのは教化であるが故に「是の故に一乗を説く」といふ、この教化を力説して、これを宣傳して人間を善の方の縁によつて導かなければ、人間は皆墮落するものである。その與へられたるところの教は即ち珠である、お前は酔うて居る、即ちだん／＼と墮落して行く傾向を持つが故に、汝の袂の中に珠を入れて置いてやると

いふのは、善き教を與へてこの酔へる衆生、醉生夢死して行く人間を覺醒して行くといふことである。然るにこの尊き教を與へられたにも拘らず、尙ほ且つ乞食のやうな生活をして居る、今の日本人は即ちそれぢや。高等なる精神的生活を否定して居る、聖人の教から言うても聖賢の學が今日は衰へて居る、論語や孟子の惡口などを言ふけれども、その中の精神といふものを見なければならぬ、仁義忠孝、天道明德の教を屬るなごといふのは馬鹿者である。そうしてそれに代るべき何物も無い、自我實現だとか變てこな事を言ひ居るが、わかつて居やしない、若い女と情死したのが自我を實現して死んだのぢや、そんなやうな事でごだい纏まりが附かぬ。西洋の思想は善いも悪いもまだ十分咀嚼して見なければならぬ、西洋の倫理學の落つく所などもさつぱり國民に徹底しやしない、いろ／＼中學校でも教へて居るが、中學生をつれて來て聽いて御覽なさい「どういふ工合

だ」どういふ工合ツていろ／＼ありますが……「いろ／＼あつてどうなつて居る」「サーどうなつて居るか私は知りません」「學校で聽いたらう」「エー聽いたけれども忘れしました」全くみんなそんなものである。現代はむやみに昔の論語とか孟子とかいふものを屬るけれども、孔孟の學をやつた者は兎に角そこに仁とか義とかいふやうな事を多少は心得て來たものである。又佛敎を本當にやれば——今は坊さんも變になつて居るけれども、本當の佛敎の教化から見れば、信仰の尊い事、善根功德の積まんならぬ事、吾々はフワ／＼して居つてはいかぬといふやうな自覺といふものは與へ得るものである。それを區々たる議論葛藤の末に流れて、この尊き教、人格を向上せしむるところの本當の力を今日は忘れて居る。たゞ議論倒れである、議論を少しぐらゐ餘計知つて居つても、そんなものは何にもならぬ、モツと人間の精神に根本の力を與へなければならぬ。だからその珠を忘れ

て居る、今日の人は「珠懸けながら迷ひぬるかな」で、結構な教を忘れて居る。この珠を忘れるといふのは、本來有つて居る佛性を言ふのではない、親切なる友人——廣げて言つたならば古往今來の聖者哲人が、人間は縁によつてのみ向上するといふ事を教へて呉れた、その教を忘れて居ることを言ふのである。教へざるところの民は必ず惡化する、教へざるところの民は必ず墮落する、教なる哉である。古今の偉くなつた人を考へて見たならば直ぐわかる、皆教から來て居る、楠正成はどうして出來た？ 教によつて出來たのである、山鹿素行はどうして出來た？ 乃木將軍はどうして出來た？ 皆教によつて出來たものである。日蓮聖人はどうして出來た？ やはり教である。教がなければあとは皆墮落である、泥棒や殺人や情死や首吊りばかりである。今の世の中を固めて居る力でも、これは政治の力ぢや、何の力ぢやといふけれども、それはホンの皮相であつて、實はさうでは

ない、人々が古聖賢の教の幾分でも未だ奉持して居る力によつてのみ、今日の世の中を維持して居るのである。支那のやうになつてしまつてはモウお終ひである、あれは國內に戦争が絶えなかつたり、政治が混亂したからだといふけれども、それは抑々未である、あんな工合に政治がガチャ／＼になつたり、戦争が起つたり、貨幣が足らなくなつたりするのは、國民の精神を指導するところの教化の大本、理論の大本といふものが倒れたが故に、その結果があゝいふ事にはあらはれて来るのである、既に大本が倒れた以上は、いくら捻ね廻しても、誰がやつてもやはり駄目になつてしまふのである。支那人が教に還らざる以上は、あの國は救はれるものではない、露西亞が教に復らざる以上は、ヨッフエが如何に何とかかんとか言つたつて、決して露國が榮えるものではない。日本の現代の人達もいろ／＼の事をこた／＼言ふけれども、この教を尊ばん限りに於ては日本は決して隆昌にはならぬ、「立正安國」の日蓮聖人の格言

は萬世凜として動くものではない。それが今の醉人繋珠の譬にあらはれて居る、その「珠かけながら迷ひぬるかな」とは、古聖賢が立派な教を興へられて居る、その教を持ちながらこれを泥土に委して居るといふことに依つて、その人が乞食をして居るといふ事になつて居る。これは法華經に基いて居る法華宗でも、今日はやはりさうである、法華經を口には讀むけれども、たゞジャブ／＼讀むだけで珠はわかぬ、袂の外から觸つて見て、何かゴツ／＼いふ重い物があるぞといふ位のことである。モウ一つそれを取り出して明燈々たるところの珠の光を認め、それを實際に金に替へて用を足さなければ駄目である。法華經の教がそれだけに實際活用されて行かなければならない。

天親菩薩はこの譬に就ては
大乘を求めず虚妄の解説を以て第一義と爲すに
は繋珠の譬を説いて治す。
と評論して居られる。

宗教と醫學の調和

緒言

抑も國家興隆の基礎は國民の精神と肉體の剛健とにある。然るに現代人の思想が稍もすれば精神的、又は肉體的の研究のみの、何れかに偏し易き傾向が、日に月に増加するのは、蓋し余りに信仰に支配せられざる科學の進歩したる推移と云はざるを得ない。昔時は現今の如く科學殊に醫學は進歩して居なかつたのに、其當時の人類が心身共に近代人に比較して健康であつたのは、思想が輕薄でなかつた昔の人は靈肉不離の理をよく熟知して居たからである。然るに現今の醫學に就てこれを例すると、其の進歩は實に著しきものであり、あらゆる病源體は殆んど研究

し盡され、只僅かに麻疹と發疹チブスの病原菌が不明であるのみであつて、唯物的方面の研究が如何に進歩したかを知る事が出来る。然るに現代人の体格は益々軟弱に陥り、更に疾病治癒の率は減退せざるのみか、反つてこれが増加率を齎らすに至つた。その原因は科學的方面のみに傾注して、靈肉不離と云ふ事が没却されたからである。之れと反對に例へば其の病原菌の簡明せられた結核症の如きは、其の撲滅策及び治療法に就いて、科學者は日夜寢食を忘れて精進し努力するも、更に其効を奏しない。その原因の主なるものは、蓋し科學者が該疾病の自然的治癒力を無視して、研究的方面のみに走り、靈的方面

更生醫院 石田 誠
醫學博士

が、疾病治癒力に、如何に重大なる關係があるかを放置するからである。全体其の據て来る病原の審らかなるにも拘らず、疾病治癒力を發揮せざる所以のもの、上にも述べたるが如く、唯物的研究のみに没頭し、吾人の腦漿を徒らに浪費する悪影響と云はざるを得ない。

之は科學に就いてのみの單なる惡弊を述べたに過ぎないのであるが、他方即ち精神的方面より之を論ずれば、彼の皮膚の疾患たる濕疹に就て之を例せん、罹病者は搔痒の甚だしきに耐へざる病症を吾人に訴ふる場合に、醫術者としては絶対に其搔痒を耐忍し、且つ刺戟物殊に其侵されたる部位を捕捉せざる様に詳細に注意するにも抱らず、投薬の未だ効を奏せざる矢先、罹病者は不知の間に刺戟して、遂に慢性の濕疹に陥らしめる。かゝる場合に人間たる醫術者と人間たる罹病者との相互間の協約であるからして、如何に言語を勞するも効果を見ないのである。

「淨化とは何ぞや」と云はんに之を二つに分けると、其の一は人工的淨化であつて、他は自然的淨化である。人工的淨化は各自の日常の排遺物を或る場所に集合し、其等が一定の距離を有する河中に流出して、其間河中のあらゆる微生物に依つて淨化され、更に一定の場所に於て無菌的に淨化され、再び吾人の口に採取さるゝ事を云ひ、之は極めて狹義の淨化である。之と反對に廣義の自然淨化とは彼の太陽であつて、人類が日常生活をなすつゝあるのは、全く太陽が東から西天に没する間、あらゆる動植物は淨化せらるゝのである。人工的淨化は一度障害のある場合は人類は之を如何ともなし得ないが、自然的淨化即ち太陽の人類に與ふる恩澤は一定不變のものである。此の意味に於て科學者たるものは自然の治癒力を太陽の淨化に依らなければならぬのである。所が科學者と云はず、罹病者は勿論のこと、普通一般のものは此の自然治癒力を知れるか知らざる

此の場合に吾人は盡すべき方法と處置に苦しみ、如何ともする事を得ない。勢ひ何者かに依つて搔かざる様になさざればならぬ。之が所謂宗教の信仰に依らざれば如何ともなし得ないのである。

茲に於て靈肉不離と云ふ事を吾人は痛切に感ぜなければならぬと同時に、宗教信念が疾病治癒力の上に及ぼす影響の、いかに偉大なるかを到思せねばならないのである。

此の時に當り科學者たる余は如何に幸福なるかを思はなければならぬ、年餘の理想とする信條を、國友僧正に由つて今や正に實行せんとするに至つたのである。

嗚呼余は何たる幸運兒であるであらうか、之を換言すれば、世尊が耆婆をして施療に當らしめられた如き思念を懐くに至つたから、余の信する所を少しく述べて見たいと思ふ、

一、醫學の宗教的淨化

か、多くの場合之を没却する傾向が、現代に到りて、殊に著しくなつて來たのである。今此の儘にして放置すれば、國家興隆の基礎は何ものに依つて發見又は確立せらるゝのであらうか、實に痛感せざるを得ないのである。故に勢ひ宗教的淨化に依つて發見又は確立せなければならぬ。此の事實は言ふに易くして實行し難いから、必ず宗教の信仰に基準せなければいけない、人類の健康保全は此の嚴密なる意味に於て宗教と醫學とを調和して、國家の興隆を計るは、宗教家と科學者たるものゝ義務であると確信し、科學者は肉體の保全を向上せしむると同時に、嚴正なる宗教家に依つて、靈的方面の問題に就いて大いに精神的努力を拂つて貰はなければならぬのである。之れ即ち國定社會の興隆を旺盛ならしむるは宗教家と科學者たるものゝ、國民に對する一大義務であつて、所謂調和的基準となるのである。

教育者倫理學者將又一般の宗教家は、概して靈を

先づ第一位とし、由つて来る肉體の缺陷の何物たるを考究せざるやの感を吾人は屢々聞知する所である。而して人類は靈肉を一致せざれば瞬時も生活し能はないから、國家の興隆は必ず宗教によりて淨化さるゝ科學者に依つて努力奮闘せなければいけないのである。例へば我が國の警察權は、發達すればする程強盜の如何に文明の利器を應用して其の數を増加するかと、其の軌を一にする。吾人をして切言せしむれば、彼強盜も亦肉體の缺陷に因する精神病的作用の異常である、従つて今後の醫學は、宗教の信仰に依らざれば國家興隆の基調は斷じて出來得ないのであるからして、余は過去に於ける宗教醫學に遡り、國家の興隆を衷心より希望して止まない、醫學を宗教化せしむるには勢ひ我が國の宗教と醫學の關係を詳細に知らねばならないと思ふ。

二、宗教醫學の歴史

今より千三百十數年の昔を顧みるに、推古天皇の

發達したものである。此の如く古來より佛教と醫藥とは不二不離の關係の下に置かれ、徳川時代の頃まで醫者は凡て僧侶であり、偶々僧侶でない者でも殆んど僧の姿をして居たものである。然るに時代の推移は二者の距離を作つて了つた。之れ深甚の考慮を拂ふべき點ではあるまいか？醫術は現世の救苦即ち一時的の救済であり、佛教は永遠の救済である、靈肉一致の救済は醫術と宗教の提携に據らねばならない、此の意味に於て醫師と宗教とは鳥の兩翼、車の兩輪である、兩者の合一は必然實施せなければならぬ。上述の如く救助事業を考察すれば聖德太子に依つて創始せられ、且つ醫術及び療養院は明かに寺院の掌る事業であつたのである。現今佛教徒の社會事業の比較的不完全なるは此の救療事業である。殊に疾病に就て努力する所が少ないのは甚だ遺憾である。之等の方面に就て、キリスト教徒殊に外國宣教師の努力に打ち任せて居るの觀が

御代に聖德太子は、聖壽僅かに二十一才にして、篤く佛教を崇び、玉造の四天王寺を難波の荒陵の丘上に移して造營し、四天王を安置して本尊となし、其東北に悲田院を設立して貧窮孤獨を救ひ給ひ、其西北に施藥院を建て、醫藥の製造頒布をなし、其北方に療病院を置き博く施療をされたのである。

これ即ち本邦に於ける佛教的社會事業の嚆矢であつて、然も亦病院の創始である。降つて聖武天皇の時代に、光明皇后は篤く佛教を信せられ、悲田院及び施療院を設置されて、貧苦者及び罹病者を救療された、更に平安朝時代において、貞觀元年右大臣藤原良相崇親院を建設し、傍ら延命院を建て、罹病者の救助に盡され、承和二年には大宰府に徳命院が建てられ、且つ承和四年には出羽の國に濟苦院、同十五年には相模の國に救急院が建てられて何れも國分寺の僧侶が其の施療に従事されたのである。之に依りて之を見るに我國の醫藥劑は明に佛教徒に依つて

ある。之れは今後大いに佛教徒の自省を要する點でなからうかと思はれる。實に聖德太子の國家の經倫、社會事業の創始、美術工藝の發達等の大事業を完成せられたのは、佛教精神の人類を最高の理想に導かれ、萬世に亘り不變の公道に住はれ、且つ法華經の開顯主義を現はされたものと云はなければならぬ。靜かに思を西天に馳せて、三千年の古昔を回顧すれば世尊は在世の病者を看護し、且つ之を救療され、更に篤信なる者婆をして施療の任に當らしめられし事を到思し、佛教と醫學は不二不離の關係の下に置かねばならぬと共に、病者を救療する事は吾人醫師たる者の使命と思はなければならぬ。

三、醫術者の使命

曩に國友僧正は常樂寺の境内に教化會館を建設して教化事業の爲に努力され、今又昭和の御代に更生醫院を開設し、余の如き淺學非才の者をして彼の國民的疾患たる結核症の撲滅及び救療に努力精進せ

新刊廣告

大僧正本多日生現下講述

法華經の行者日蓮

佐渡塚原三昧堂、丈餘の雪に凍えて飢えて、而も「御佛の白き衣もて日蓮をおほはせ給ふか」と合掌し、龍口斷頭場裡「臭き頭を刺ねられて金色の如來となる、これ程の喜びを笑えかし」と宣ひし日蓮上人、今昭和の御代に本多日生現下によりて、法華經身讀の崇さを講述せらる。信仰の者には金剛の珠玉にも比すべき小冊子か、敢て同信の士に勸む。

一部金拾錢(送料共) 二十部金壹圓五拾錢(送料共)
五十部金壹圓五拾錢(送料共) 百部金六圓(送料共)

名古屋市東區田代町字城山七十七

發行所

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九番

らるゝ事は、之ぞ眞に世尊の律法にかなひ、延いては聖徳太子の一乘開會の大理想を繼承し、實現さるゝのである。此の秋に當り、余は如何にして其の大理想を實現せしむるや否やの信條に就き、大いに考慮する所である。幸にして佛徒諸士の同情を賜はれば、假令救療事業は至難とは雖も、信念を吐露すれば、彼岸に達するの日近からん事を熱望して止まないものである。

佛徒諸士!! 世は進歩して醫術は佛敎の圏外を去つたのである、而し、肉体を救ふには必ず精神を以てしなければならぬ。之ぞ宗教と醫學の調和である、佛敎信仰者の大理想である、宗教精神の發現をして一日も速かに余をして宗教精神の心髓を七千萬の同胞に徹底せしめん事を切に希望して止まざる次第である。

聖

語

實に佛に成る道は師に仕ふるには過ぎず、妙樂大師弘決四に云く、若し弟子ありて師の過ちを見れば、若は實にも若は不實にも、其心自から法の勝利を壞失すと。又止觀一に云く、常啼は東に請じ、善財は南に求め、藥王は手を焼き、普明は頭を刺らる、一日に三度恒河に身を捨つるとも、尙ほ一句の恩を報すること能はじ、況んや兩肩に荷負し百千萬劫するとも、寧ろ佛法の恩を報せんや。(身延記)

とても此身は徒に山野の土と成るべし、惜みても何かせん、惜むとも惜みとぐべからず、人久しといへども百年には過ぎず、其の間の事は但一睡の夢ぞかし。受難き人身を得て適出家せる者、佛法を學し謗法の者を責めずして、徒に遊戯雜談のみして明し暮さん者は、法師の皮を著たる畜生也、法師の名を借りて世を渡り、身を養ふといへ共、法師と成義は一もなし、法師と云ふ名字をぬすめる盜人也。(松野抄)

如來滅後二千二百餘年に及んで五濁さかんになりて年久し、事にふれて善なる事ありがたし、設ひ善を作す人も一つの善に十の惡を造り重ねて、結局は小善につけて大惡を造り、心には大善を修したりと云ふ慢心を起す世となれり。(月水抄)

聖訓摘要

本多日生

遠藤左衛門尉御書

この中に簡單な一言であります

靈山への契約に此の判を參らせ候。(遺文錄 一〇三五)

といふ事がある、これは非常に愉快なことである。靈山淨土の佛様の所にお出でになるのに、日蓮の弟子であり信者である、これは法華經の行者として間違ひの無い者であるといふ證明書を書いて上げますから、之を持つてお出でなさいといふのである。所がこの世で墨で書いた證明書は、死んで持つて行くといふ譯にいかない、握つて居つても焼場で焼かれてしまふか、墓場の中で腐つてしまふ。然るにこの判を持つてお出でなさいと仰しやつた「此の判」はごういふ判だらうか。能く日蓮聖人は「閻魔法王の前に行つても、日本國の法華經の行者日蓮坊が弟子檀那なりと名乗つて通らせ給ふべし」といふことを言はれる、法華經の信者は左様なことは無い譯であるが、若し間違つて閻魔法王の法廷に引つぱり出されたならば、何れ他の事を多く辯護する必要は無い、「私は随分善い事として居ります」「ナンと言つても中々勘辨して呉れないから」「私は日本の法華經の行者日蓮聖人の信者であります」と言へば、閻魔法王が衣冠を正して「ア、さ

うか、それではこんな處に伴れて来てはいかぬ」と言つて取調をしないで直に放免をして呉れるといふことを書かれて居る。それだけ聽いて居ると如何にもうまい事のやうであるけれども、その上に苦い事を言はれて居る、その時に「ちよつと日蓮の信者といふ印を一つ見せて呉れ」といふに違ひない、その時に日蓮の判を持たざらん者は「よも御用ひ候らばじ」日蓮の弟子なり信者なりといふ證據の物が無い時には、これは信者ぢやといふことになる、さうなつたら大變ぢやといふことが書いてある。それで多くのなまぬるい説教者といふものは「日蓮が弟子旦那と名乗つて通らせ給へ」といふことばかり言つて、非常に簡單なやうにいふけれども、その軽い方だけ聞かされて居つては、實際の時にマゴツクのである。そこでモウ一つ苦い、日蓮が判を持たざらん者はよも御用ひ候はじといふこの點を考へて置かなければならぬ。私は始終その事を考へて、御文章に依つて刺戟を與へられて居つたが、今日之れを讀んで見ると、靈山會上への御契約に判を一つ參らせるといふ事がある。これはどんな判であつたか判らぬけれども、私が領解して居る點を以つて申せば、この判といふ物は今日いふ書判であるとか、木で拵へた判、それを下さつたものではない、「この判」といふのはやはり教義上の事であるから、或は南無妙法蓮華經と書いて贈られたか、或はその他の教義上忘れてならぬ大事な事を「之をお忘れなさつてはならぬ」と言つて贈られたのでありませう。即ち私が此處にお話して居るやうな事が、簡單に言へば日蓮聖人の判を諸君が著捺して貰ふことになるのである、唯だ紙に捺した判や、木に彫つた判を有難がつて、經帷子の香中に澤山判を捺して貰つて居る人もあるけれども、千ヶ寺詣などと言つて大きな判を幾ら捺して貰つた所が、焼場に持つて行けば一通に灰に成つてしまふ、五分間經たぬ中にヂワ〜と焼けてしまふ、「私は壽量品を書いて貰つた」とか

「私は提婆品を書いて貰つた」とか言つて、それで宜いやうに思うて居る、そんな物を閻魔法王の前に着て行かれると思うて居るが、左様な物はこの世の中に残つて焼かれてしまふ物である。これは昔の低級なる思想である、愈々閻魔法王の前に於いてまで日蓮の判だといふ、日蓮の弟子ちやといふ證據は、「日蓮の命に懸けて弘めた法華經は斯ういふ意味で、その教の眞髓は此處にある、それを信じて居ります、其の點に於て日蓮が弟子ちやといふことは明かでありませう」と申上げる、その言ひ方の有様で「モウ直ぐ判かるのである、其處で贖物か眞物かといふことが直ちに判かるから、「あなたは宜しい、サアお通りなさい」といふことになる。それを判といふ世俗の言葉を借りて仰せになつたけれども、「日蓮が判を持たざらん者はよも御用ひ候らはじ」といふ聖訓を、胸に刻んでお置きになることが宜からうと私は考へる。

法華取要鈔

これは大切な御遺訓であります故に、既に「聖訓要義」として全文を詳細に御紹介したのであります。

爾前得道有無御書

この中には別に御紹介する程のことも無いと考へます。

上野殿後家尼御返事

故聖靈は此の經の行者なれば即身成佛疑ひなし。さのみ嘆き給ふべからず、又嘆き給ふべきが凡夫

の理なり。たゞし聖人の上にもこれあるなり。釋迦佛御入滅のとき諸大弟子等の悟のなげき、凡夫の振舞を示し給ふか。いかにもいかに追善供養を心の及ぶ程はげみ給ふべし、古徳の言葉にも心地を九語にもち、信行をば六語にせよと教へ給ふ理にもや候らん。(遺文錄)

これは非常に善い教訓で、このお手紙を贈られた上野殿尼御前の御亭主がお亡くなりになつた。この上野殿といふのは身延或は富士の大石寺を寄附せられた聖人の大檀那であります、その上野殿の奥方に贈られたのであります、あなたの御亭主はこの間死なれたけれども、信心の立派な人であつたから、即身成佛は疑ひない譯である、だからそんなにお嘆きになることはない。けれども佛に成つたにしても訣別の悲嘆といふものは、凡夫の有様これは免かれぬことであるし、凡夫ばかりではない、悟りを開いて居る人でも訣別の悲嘆といふものは辛いものである、釋迦如來が御入滅の時には悟れる弟子達がみな涙を流して居ることが涅槃經に見えて居る、あなたが嘆かれるのも無理はない譯である。佛には成られたに違ひないけれども「モウ自分の亭主は信心が強かつたから佛に成つたに違ひない、そんならお寺に行つて年回供養などをして、塔婆などを立て、貰つてお布施をするのは無駄だから、家で牡丹餅でも拵へて食はう」といふやうなことはないかぬ、如何に夫が信心が強かつても、追善回向といふことはやはり怠らぬやうにしななければならぬ。さうすると茲に一つの問題が起る、法華經を確實に信心して居つた者は成佛して居るのに、それを又年回を勤めたり四十九日の追善供養を營んで、「ごうぞ佛に成つて下さい」と頼むのはをかきな事ぢやないか、左様なことをいふのは疑つて居るからぢや、成つて居るかも知らぬが成らぬかも知れぬといふ疑ひがあるのだらう、成つて居るに違ひないと言へばそんなに頼みに行つたりしないでも宜いぢやない

か、斯ういふ議論が起る。眞宗はさういふ議論を取つて居るから、年回といふものを勤めない、お盆などといふことをしない、「モウ往生疑ひない、確かに極樂淨土に行つて仕舞つて居ります」といふ。所が日蓮聖人は、勿論その位の事は十分承知して居られるから、其處を仰しやつたのである。あなたの御亭主は成佛疑ひないけれども、成佛したから放つて置いて宜いといふものではない、やはり追善回向の勤めを怠つてはならぬ。それは一方に於いては成佛の理由が確實であつても、そこに人情といふものがあつて、その上にもどうぞ追善功德を御回向したいといふことは大事な事である。であるから昔の言葉にも「心地を九識にもち、修行を六識にせよ」といふ言葉がある、これはどういふ事かといふと、世の中は理論一點張には行かぬ、冷かな理想にのみ囚はれてはいかぬ、そこに人情の温かきものが加はつて始めて美しき人生が出来るのであるから、法華行者は成佛疑ひないけれども、追善回向をせよといふことを仰しやつた。これに依つて法華宗は何れの寺に於いても、檀家がみな追善回向をするので、眞宗が「法華はえらさうにいふけれども、狼狽して居るから回向などして貰ふのだ」と悪口をいうたならば「それはお前の方が冷やかな人間だからだ、日蓮聖人の御遺文にもそんな事は能く説いてあるけれども、それはお前の考の方が一を知つて二を知らぬといふものぢや」と言つてボンと焙烙を割つてやらなければいかん、さうしないと彼等は慢心して居つて法華宗の悪口などをいふから……。先年社會主義の人々が「吾々の仲間には無頼漢は滅亡論を取つて居るから、死んだ者を葬式などする必要は無い、そんなことに金を費やすのは無駄な事だ、そんな金があるならば鮮を食つた方が宜い、それ故に吾々の方では葬式したり墓を拵へたり、そんな面倒な事はせぬ、死んだ者の命日などを覚えて居つても何にもならぬ、戒名などをつけるのも無駄なことだ、

名前ナンといふものは符號で、生きて居る間だけ入用なんだ、死んでしまつたら名前も消えてしまつた方が宜い、それ故に自分等の方では、死んだ者は焼いて粉にして、これを風の強い日にバツと舞はしてしまふ、焼いて粉にして吹き飛ばせ、これが吾々の信條である」といふことを言つて居りましたが、その時に私は言つた「成る程唯物論の理想からいうたならばさうかも知らんけれども、併し靈魂の有無には拘らぬ、昨日まで一緒に苦樂辛酸を共にしたる者を、その骨を拾つて祈念するといふことは人情として當然の事ではないか、それを焼いて粉にして吹き飛ばせといふやうなことは、人情といふ事さへも知らぬ者である、そんな人情も判らぬやうな頭腦で世の中の事をやつても、人生といふものは理屈一點のものではない、大事な部分は人情と人情と結びつく所に於いて温かな人生の幸福といふものがある」と言つて議論をしたことがありました。所が後から聞けば「あの坊主、社會主義の者を持つて行つて葬つたならば、後に忠臣蔵みたやうに流行り出して、線香代でも儲かると思つて骨を貰ひに來たのだらう」と言つて、社會主義の者が悪口を言つたさうであります、それは己れの心を以つて人を量るといふものである。私は社會主義の人々が左様な冷やかな頭腦を以つて人生が幸福になり得ると思つて居るのは、一種の妄想であるといふことを斷言する者である。

そこで日蓮聖人が高い「教義を知り、確乎不拔の信念を以て、法華の行者は臨終の刹那必ず成佛することは疑ひないけれども、而も尙ほ殘る妻子は追善回向を怠る」と記された所に、尊い所があると思ふ。

上野殿御返事

この中には特に御紹介する點を見出しませぬ。



(童話) 忍辱仙人

梶木三葉作

ある山奥に大きな森の林があり、その中に一匹の可愛らしいリスが住んで居ました。この林には古い一本の樅の木が有りました。この樅の木は其の根本の小さな穴に住んで居たのでした。そして春になると草や木の芽を食べ、秋になると木の實を取つてはいくつかの春や秋を送つて御り淋しく暮して居たのでありました。

ある秋の夕方、雨の降る日、リスは相變らず當時の様に美しい物を見つけて大喜で、今しもお家の方へ持つて歸らうとして居た時でした。向ふの山の高い木の上で、これを見て居た眼の早い鳥は、エライ勢でリスを目

を少しも知らぬ無慈悲な王様でありました。ある日、カリ大王は皇后様と大勢の家来や女官達を連れて山へ狩りに出かけました。廣い山を歩いて、兎、雉、鹿と色々な獲物を多くさん取つたので、終にはサンムクに身体が勞れて王様は草の上へ好い心持でカラムン寝てしまいました。家来や女官達はつまらなくなつて終りました。そこで大勢はうち連れて山から林へと遊びに出かけました。段々奥深く遣入つて行きますと、静かな林の間から美しい聲で、何か讀んでゐるやうな人の聲が、聞へて来ました。一同は不思議に思つて耳を澄して聞いてみると、確かに人が何か讀んで居る聲である。皆んなはスキニヤシニ、怖々ながら近づいて見ると大きな一本の古い樅の木が有りました。その根本にはヘンテコチ人のやうな、又人ではないやうな山男が、木の皮の着物を着て、一心に何か唱へながら修行をして居るのでした。これを見た人々は驚いて終りました。

「あなたは何處から来たの？ 一件こんな静しい處へ何しに来たの？」
と問ひかけました。すると今まで沈黙つて居たつづつて居た仙人は、静かに目を聞いて答へました。

「私はホントりの嬉しい事、ホントりの楽しい事を、いつまでも／＼永く續けて居たいと思つて其の修行に來たのです、それには怒る事、喧嘩をする事が一番悪い事で、私は何んな事でも我慢して修行したいと思ふのです……」と

「おん……」と
語り終つた仙人は、又、もとの様に目を閉つて静かに修行をして居ました。この話を

がけて飛んで來ました。そして恐ろしい聲で後ろから
「こらッ……待てッ……」

と怒鳴りました。だしぬけにスゴイ聲で怒鳴られたので、リスは飛上つて驚きました。見ると恐ろしい顔をして一羽の山鳥が追かけて來てゐます。顔色を替へて驚いたリスは、食物を口にクワエると後にも見すにお家の中へ逃げ込んで終りました。何しろ堅い根と根の間にある小さいお家ですから、鳥はじだんだん踏んで怒りましたが何うする事も出来ませんので、鳥はカン／＼に怒つて終りました。そして

「こんど見つけたらキントひどい目に會はせよう」と思はす二人は
「偉イッ！」
と叫びました。それから二人は、お互に今までの喧嘩を改めて、仲よくしませうと堅い約束をいたしました。

「時にリスさん！ 私等のお友達に、あの仙人さんが來て呉れたので、大変楽しく賑やかになつたわね……」
と語りながら喜んで居たのでした。

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

「いぢ惡の懲り鳥！」
と怒鳴り返してやりました。こんな事があつてから當時も二人は、會ふ度毎に悪口を云ひ合つては喧嘩ばかりして居ました。これまでもあつた林の中も、こつした争ひの爲にいつとはなくいやな空氣が廣がつて行きました。

今日も丁度お妻過ぎの頃でした。鳥は木の上で、リスは穴の中から、二人は負けず劣らず一生懸命に悪口を云ひ合つて居ますと何處からともなく一人の不思議な仙人が出て來ました。そして暫らく二人の喧嘩を見てゐましたが、やがて仙人は何を考へたか、その木の下へドクカと坐りました。そして、獨言で

「人をいぢめれば何日は自分もいぢめられる……」人を悪口すれば自分もキツと悪口を

を少しも知らぬ無慈悲な王様でありました。ある日、カリ大王は皇后様と大勢の家来や女官達を連れて山へ狩りに出かけました。廣い山を歩いて、兎、雉、鹿と色々な獲物を多くさん取つたので、終にはサンムクに身体が勞れて王様は草の上へ好い心持でカラムン寝てしまいました。家来や女官達はつまらなくなつて終りました。そこで大勢はうち連れて山から林へと遊びに出かけました。段々奥深く遣入つて行きますと、静かな林の間から美しい聲で、何か讀んでゐるやうな人の聲が、聞へて来ました。一同は不思議に思つて耳を澄して聞いてみると、確かに人が何か讀んで居る聲である。皆んなはスキニヤシニ、怖々ながら近づいて見ると大きな一本の古い樅の木が有りました。その根本にはヘンテコチ人のやうな、又人ではないやうな山男が、木の皮の着物を着て、一心に何か唱へながら修行をして居るのでした。これを見た人々は驚いて終りました。

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

「お山のお孫や雀のお歌」を歌つて遊びました。鳥は

處がツクキから楽しく遊んで居たリスや鳥は、ダシメクに大勢の人が、目の前に来たもので「何か走つたのかしら」と、目を丸くして驚きました。そして鳥は木の上へ飛び上つて、何うなる事かと、小頸をかして下を見てみます。リスはお家へかけ込んで様子を探つてゐました。

草の上で氣持よく寝て居たカワ大王は、ふと目が覺めて通りを見ると誰れも居ないので大變怒りました。

「俺を置き去りにして、何處へ行つたのだッ……ア、解つた、キツト、向ふの林の中へ行つたに違ひない……今にひどい目に合はしつてやるから！」

とブン／＼怒つて、足早に探しに来て見ると家來達は、妙なお化の様な一人の仙人と何か話をして居る處でありましたから、王様は頼ひに青筋を立て怒りました。そして仙人に向つて

「許しも受けずに、我が家來を呼び集めた

汝は何奴である？ 返答に倅つてはその分にして置かぬぞ……」

と、腰の刀に、手をかけて詰めよりました。仙人は少しも驚かないで、靜かに王様に「私は忍辱仙人と申します。多くの人達が、心の底から欲しい／＼と一生懸命に思つてゐる、ホントの喜び、いつまでもいつまでも消えない樂しみを欲しいと思ひまして、修行をして居る者で御座います。私はその爲には、何んな辛い事でも、怒らずに我慢をいたしますと、佛様にお誓ひを立て、居る者で御座います……」

とキツマリ答へました。すると、無慈悲な王様は

「よしッ、生いきな事を云ふ奴だ、それでは汝の腕を切つてやる……」

と云ふより早く刀を引き抜いて、仙人の右腕を、スバリと切り落して終ひました。そして

「どうだ、よく我慢が出来るか？」

とあざけるやうに云ひました。忍辱仙人は

「わたしは何んな目に合はされても、人を恨むやうな事はいたしません……」

と、また申しました。木の上へ、この有様を見てゐた鳥は、涙を流して泣いて居ました。こんどは更らに、カワ王は

「これでもまだ我慢すると申すか？」

と、情／＼しげに、太ももから左の足を切り下しました。これを見てゐた女官や家來達は、聲をあげて泣きました。穴の中から、この様子を窺つて居たリスも、王様の無情を恨んでゐましたが、何うする事も出来ません。只人々と共に泣くばかりでありました。

すると、やがて忍辱仙人は靜かに王様に向つて

「王様！ 佛様は、よく我慢をする者、よく怒らずに居る事の出来る者は、後には、必ず偉い人になるとお仰やいました。この佛様のお言葉に間違ひなく、又私の心が、正しく立派でありましたならば、キツト私のこの身体は、もとの通りの身体になるでございませう。」

う……そして私の心も、佛様のやうにいつまでも／＼楽しい／＼心となるでありませう……」

と言ひました。

その時、林の上には、一面に紫の雲が降りてゐました。また何んとも言へぬ好い香りの風が、何處からとなくそよ／＼と吹いて來ました。通りの木の上には、赤らしい赤だ

の青だの、白だの黄だの、實に不思議なきれいな小鳥が、多くさん集つて來ました。そして美しい聲でオケストラを始めました。王様や、家來達は、この美しい有様の中に、たまに立ち上つて居るのであります。

其の内に、不思議にも、今まで、足と手を切り落されてゐた忍辱仙人の身体は、見事にもとの通りの身体と成つて居りました。無

慈悲なカワ王も、この不思議な美しさに驚いた心はスツカ／＼無くなつて終つて、ハレム／＼とした、きれいな心となつて、悪い王様も生れ替つた立派な王様と成つて、大勢の人民から親のやうにしたはれる善い方となりました。

人として怒る事、喧嘩をする事は一番悪い事です。私達も喧嘩をせぬやうに致しませう。



醉生夢死と生活の向上

土持良達

二、家庭の向上

次には家庭の向上であります。一軒の家を圓滿に平和に向上させて行く事である。その最も大切な注意には色々ありますが、

まず各自が小さな犠牲を拂つて行くといふ事はお互ひに喧嘩にならず、妻は夫に譲り夫は妻に譲る、そうして行つたならば、遂には平和の家庭を作るのであります。總て自分を思

三、社會の向上

先づ當面の急務とする點を申しますれば、お互ひに商賣に勵み合ひながら、道徳を重んじて行くといふ事でありませう。日本が外國と實をなして信用を失つて行くといふのは道徳に缺けた所がある、どうも日本人の常として品物の見本は誠に結構なんです、夫れ

を幾ら幾ら持つて来て呉れと云ふ事になると
何うも甘く行かない、益んに粗製する。折角
外國と清き交際をしやうとしても面白く行
かないと云ふ事になつてしまふのであります
こゝろ云ふ點を覺醒し改良して行かぬばなり
ません。決して日本は外國に劣ることはな
いのですから、正々堂々とドシ／＼外國
へ輸出して行けば、經濟も向上して行くの
で、色々の社會問題を緩和する上に與か
つて力ありと思ふのであります。

四、國家の向上

國家の向上にはその國が成立つてゐる歴史
といふものがあります。殊に我々大日本帝國
は三千年來他の國に見る事の出来ない最も
貴き歴史を有してゐる國柄であります。こ
の我が日本の建國といふ事を考へても決して
他の國に劣る事は無い、充分外國の模範
として誇るに足るのであります。長くも、幼
語の中に「國を辱むること安遠に」と仰せに

なりました。安遠といふ處にお互ひが考
へればなりません。

苟も萬世一系の立派な血筋が流れてゐる
處の國柄である。その國柄の聖代に幸ひに
生れて来たのである、それを考へてもお互ひ
に國を向上させて行く考へがある筈でありま
す。私は一にも二にも外國が悪いといふ
のではない。長くも五ヶ條の御誓文中に「智
識を世界に求め……」と仰せになつて居りま
す。外國の善い所は遠慮なく取り入れ、悪
い所は打ち捨て、日本の國體の立派な處を
益々輝かして、そうして世界の模範國と
なるやうにと向上せしめねばならぬ。何で
も外國から来たものがいゝと外國にかぶ
れる様な事があつてはならぬ。

結一佛の眞の教

以上述べましたる向上、それを立派にす
る爲めには、そこに立派な「教へ」が必要で
あります。人生を活かして行くやうな向上

々活を離れて吾人は救はれる様に宣傳して
居たのは、佛の眞の教を眞き遠へた結果で
あります。法華經宣傳の偉勳者たる末法の
大導師日蓮上人は「極樂百年の修行
は彌土一日の功に及ばず、正像二千年の弘
通は末法の一時に劣る」と喝破せられて居ま
す。人生を離れての教は何等價値の無いも
のであります。法華經こそは實に、自己の向
上、家庭の向上、社會の向上、國家
の向上を赤探々に教へられ、人生の光あ
る生活を如實に説き明されたる唯一の寶典

であります。吾人は、折角 貴い人生に生
れて来たのであるから、一生空しく暮して
萬代悔ゆることがあつてはなりません。氣
が着いて見た時にはもう遅いので困る「も
う私は何にも用がありませんからお寺へ詣
つて……」といふ様になつてからでは間に合
はないんであります。少くとも佛の眞の教
へと云ふものは所謂渡瀾とした青年を中
心として教へられたものです。渡瀾たる青
年を中堅として老若男女悉く來つて、こ
の大なる教へのもとに集まり醉生夢死に終ら

記事

各地教報

▲東京統一團本部教報 昭和二年
一月廿八日(統一團改築落成式)午
後一時開會本多總裁親下出席執行

來會者三百餘名すこぶる盛會、山
田三良博士夫妻を始め佐藤中將、
岩野少將、宮岡中將夫妻等の顔も

性を有する教へ、それを持つて行かなければ
なりません、その人間生活を活かしてゆ
く教へは何であるかと申しますと、それは釋
迦如來の教へであります。凡そ人類に生を受
けたるものは、皆悉くが釋迦如來の膝下
に集まるに差されば、此の複雑なる人生を間
違なく渡つて、彼岸に到達する事は出來ぬ
と斷言いたします。釋尊は實に人生々活
の羅針盤とも申すべき法華經を後世に残され
以て吾人々類の無明の闇を打ち破りて眞の
力ある 光明を御與へ下されたる先覺
者であります。本當に吾々の手を取つて御救
ひ下さる御方は 釋尊を置いて他に求める事
は絕對に出來ないと云ふ事を 吾は斷言いた
します。

如何に財産があつても他人の物では一向に
有難くありません。釋尊の説法は實に五十
年の永い間でありましたが、一貫して吾人に教
へられたものは法華經主義の所謂 向上生
活と云ふ事でありませぬ。或る宗の如く人生
ないやう一歩一歩複雑な社會に處して行
くべきであると思ひます。

人身は受け難し爪の上の土、人身は持ち
難し草の上の露。百二十まで持て名なく
たして死せんよりは、生きて一日なりと
も名をあげん事こそ大切なれ

我が門家は夜は眼を斷ち晝は眼を止め
て之を案ぜよ、一生空しく過して萬歳
悔ゆること勿れ。
(富木殿御書)

見へた。

△二月六日午後一時開會「正法傳統の概略本
多日現下。講演後總裁親下を中心として座
談會あり。△全十三日午後一時開會、「日什聖
人」長谷川義一師。「日本文化と佛敎」本多日
生現下。講演後座談會あり。來會二百餘名。
△全廿日午後一時開會。「日蓮主義信仰の中心
觀念」本多日現下。講演後座談會あり來會
二百餘名△全廿七日午後一時開會。「所感團

眞野島達平氏「所感」議員岡野源吉氏「昭和の御代を迎へて」佐藤鐵太郎中將。本日降雪の爲(來會者百八十餘名)△三月六日午後一時開會。「阿含經と法華經の關係」本多日生現下。講演後座談會あり。△全十三日午後一時開會「子地の愛」梶本顯正師。「如來の觀たる人間」秋山乾英師。「日蓮主義より觀たる日本國の神令」野口日主上人。△全廿日午後一時開會。「悲華經に就て」本多日生現下。本日は總裁現下の御都合整しく座談なし。△全廿七日午後一時開會。「阿含經の二三に就て」國員加藤重太郎氏。「正しい信仰」梶本顯正師。佛教決定の二大說法」岩野直英閣下。

▲名古屋教報 四月八日笠川監督布教師の來名を讀會に統一國婦人會聯合春季大會を開く。集る者百五十。「法華經現代譯講義」國友師。「勤作作法に就て」笠川監督布教師。終つて餘興等あり、有益なる會合であつた。△全十一日本多現下の法華經自我傳講義。十二日夜社會教化講演會。「思想と佛教」本多現下總業教化會館に充つ。十一日より四日間各工場にて自展會の講演があつた。

就て「無井特命布教師△十八日徳永宅にて、生活に就て」和井田氏。「正者稀れず」京藤師△二十日空閑寺にて「彼岸會に就て」京藤師△二十二日空閑寺にて「親恩恩淑の精神」本多現下△夜大紙俱樂部にて「法華經の修行」本多現下△四月四日空閑寺にて「生命の本流へ」草切信榮師。「佛教徒の覺醒すべき二方面」寺村管長現下何れも頗る盛會多大の効果を奏した。△五日午前十時相馬小馬三氏本葬。空閑寺にて井村日成現下導師原田本山部長副導師外十名の本宗僧員列席數百名の會葬者堂の内外に溢れ頗る盛なる葬儀を営まれた。全氏は明治二十八年三月當地で製鉛業を始めるに當り、舊來信仰し來つた眞宗の邪義を捨て、顯本法華の正義に皈し、以後家運の隆盛と熱烈なる信仰は、親族を悉く改宗せしむるに至り、表裏に傾きし寺門の經營と資産の増殖を計り、前後二回管長本多現下より賞状を賜はる。大正十年病の爲め半身の自由を失ひしも、信仰は益々堅固であつて末法道義の衰頹せる時に當り、氏の如き、實に得難き強信の士であつた△四月三日午前三時四十分唱題の裡に安祥として歸終した。年六十七。

於て檀信徒一同大正天皇葬儀を嚴修し、統一團例會を繰上げ、講演會を開催し「健國の理想に就て」野崎善太郎。「我國體と佛教に就て」野崎嘉貞「所感」後藤長太郎の講演あり盛會であつた。△三月十三日立正社分會を設置する事にし各員に於て信仰に關し討論會を開催した。△全十三日より統一團青谷支部員、立正社青谷分會員に於て奥丹後地方震災罹災民救護團を組織し、立正寺住職野崎嘉貞師を導師として三日間に亘り、晝夜托鉢修行をなし、漸く施米四俵を得て町役場を経て宮津震災事務取扱出張所宛て急送した。△全十八日立正寺に於て檀信徒一同集り釋尊涅槃大法會を營み尙ほ震災罹災死者追悼施餼鬼法要を執行後講演會を催し「開會之辭」後藤長太郎「所感」田中安太郎。「親子慈愛」野崎善太郎「彼岸」野崎善太郎。「涅槃に就て」野崎嘉貞の講演あり、盛會であつた。尙ほ今後涅槃會は一層盛大なる法要を營むる事とし、午後五時閉會した。

▲大阪教報 三月八日蓮成寺にて談話會十二日空閑寺にて「佛性顯讚」京藤師「息思に

▲鳥取縣青谷 二月七日、八日立正寺に

▲金澤通信 家庭講演、三月六日釜屋多田氏宅にて唱題の功德「能仁一十師△家庭講演、三月六日野町橋本宅にて「幸福の第一歩」能仁一十師△家庭講演、三月七日日本多町墨田

氏宅にて「思想の波をけつて」能仁一十師△家庭講演、三月八日高岡町越村宅にて「生死とは何ぞや」能仁一十師△涅槃會、三月十五日釜屋本成寺にて「涅槃の目的」寺島常誓師△常樂會、三月十五日六斗林本覺寺にて「交纏の

歌び」能仁一十師△連續講演、三月十八日、リ二十四日まで七日間本長寺に開く。「日蓮の地獄篇」能仁一十師。集ふ者毎夜百餘名盛會を極む。

更生醫院の

看板をかゝりて

常樂寺教化會館の診療所

靈肉一致の信念から

國友師をたすくる 石田博士

さきに寺院開放の實をあげ、境内に教化會館を建て傳道と一般公共會堂とした市内中區新榮町の常樂寺住職國友日斌師は、更に右の教化會館の社會事業の第一着手として診療所を開き十日から事業を初めることになつた。教化會館の診療所は新らしく「更生醫院」の看

板を掲げるはずであるが、國友師はこれにつき。「今度の診療所は更生醫院と名づけることにしたが、更生とは佛教の理想で肉の病ひが癒へ更に精神的に新に生れる意味で、その何れかに病ひをもつ現代人の傾向を救ひたい念願からです

結核症の治療の如きは完全な奏効薬がなく余りに科學的に陥つた結果だと思はれます。この事業は勿論私の獨創ではありません、佛院に名醫者婆が歸依し、聖徳太子が天王寺に施藥院や療養所を設けられたやうに治療に信仰を加へなければ駄目であるといふ信念からであります、たまたまこの意見が醫學博士石田誠氏と合致して博士を煩はして開始することになつたのです」と語つたが、この更生醫院は單なる社會事業でなしに相當の理想境を實現する目的でその収益全部を更に別途の公益事業に充つる計畫である。なほ右について開始準備中の石田博士は語る。「國友師と一緒にやる今度の事業の精神については師のお話で

つきてゐます、師と私とはこの精神のもとに異體同心です、委しい意見はゆつくりお話ししたいのですが、私は醫者として現在の日本の醫術を太古の治療法にまで還元して、いはゆる靈肉

一致の醫學を實現せしめたいのです。師と意見を同じうしてこの八日から初めることにしました。診療所の収益は師の考へて更に別な事業に廻される筈です」(名古屋新聞より轉載)

右は傳ふる所によると遺骨の埋葬所たる若松妙國寺から、有名な千葉縣七里法華の中心地なる土氣の信徒磯崎氏が寛永八年八月十日に分骨埋葬五輪の寶塔を建立したるものであると。

顯本法華宗開祖日什上人

改宗五百五十年祭報恩會

品川本光寺にて分骨發掘さる

比叡山三千人の學頭であつたが六十七歳で改宗し顯本法華宗の開祖となり日蓮教義を宣傳すること十二年天奏三回武家諫曉數度七十九歳にて遷化した日什聖人の改宗五百五十年祭報恩會が三月二十七日東京市外品川本光寺(日什最初直建の寺)にて顯本法華宗東部寺

院(東京府神奈川縣栃木縣)聯合の主催にて嚴修されたが今回の如く改宗奉恩會を盛大に舉行すること同宗初めのことであると。尙右本光寺にては最近目黒川改修の爲同寺歴代の墓地を移轉するのやむなきに至り發掘の結果日什聖人の分骨が發見された。

久しく捨てられてあつた伊勢治田の實成寺、四日市に新寺が建てられ、追分に教會所が出来たのに、昔からあつた精舎を廢棄されては佛祖に相濟まぬと考へて、強信の老女藤牧の氏を説いて、優婆塞として實成寺復興の任に當らせる事にした。四月十七日寺門奥陣の法要を修し一場の講演を開くべく、名古屋から國友清水、四日市から田久保が出掛け行つた。參詣者百餘名「日蓮主義に就て」田久保師「佛陀の教と正しき信仰」國友師「集れる者は皆熱心に聞いた。やがて北勢の地法發盛に鳴り響く時が来るであらう。左近不便の土地でないのに、大變山奥の様に宣傳した無考の坊さんがあつた事が、實成寺に興した様だ、或はすべき事と思ふ。

社寺建築及臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不充分的なる檜材は于利狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ関町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

- 設備大六ノ材檜海産
- 一、耐久防腐
 - 二、蟻害絶無
 - 三、香氣清逸
 - 四、木質堅緻
 - 五、理整松木
 - 六、木高性色

製 複 許 不

昭和二年四月廿五日印刷
昭和二年五月一日發行
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
(第三百八十六號)

料 告 廣 一 統		價 定 一 統	
表紙	一頁	一冊	金貳拾錢
一頁	拾五頁	半年	金壹圓貳拾錢
一頁	拾五頁	一年	金貳圓貳拾錢
一頁	拾五頁	送料共	送料共
一頁	拾五頁	送料共	送料共
一頁	拾五頁	送料共	送料共

編輯兼 國友日斌
印刷所 鈴木日斌
印刷所 三益社

發行所 統一發行所

編輯所 統一編輯局

電話東京五一〇七一番
名古屋一〇八一九番

目 次

法華經七譬の意義……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける觀音賢經……………	井 村 日 成
釋尊の衆生濟度……………	本 多 日 生
我が理想の人傑……………	石 田 誠
聖訓摘要……………	本 多 日 生
佛教と社會事業……………	岡 山 三 治 郎
記 事……………	

第三十三號 六月

統

一